

実測図で読む

ガウディの建築

H
E
I
b
a
l
l
a
z
g
o
p
o
r
o
l
a
s
m
e
d
i
c
i
o
n
e
s
s
o
b
r
e
l
a
a
r
q
u
i
t
e
c
t
u
r
a
d
e
G
a
u
d
i
A

田中裕也

彰国社

はじめに

日本を離れて35年になった。

故郷を遠く離れ、海を渡るとそこは別世界であるというのは間違いではない。しかし、住み始めて気付くのは、所詮同じ血が流れている地球人たちの中に自分がいることだった。

25歳のとき、スペイン・バルセロナへと渡ったのは、自分と向き合うための小さな冒険であった。不安定な青春時代ではあるが、人生の中でこれほど面白い時期はない。その面白さは、不安と好奇心が入り交じり、それらに揺さぶられながら方向を模索することの中にあるのかも知れない。

このときから、私はガウディ建築の実測と作図に取り組んできた。

スペインをはじめて訪れた大学生時代、ガウディの彫刻でつくられたようなサグラダ・ファミリア教会を前に、ひどいカルチャーショックを受けてギブアップ状態であった。到底、自分には手の届かない建築の世界に見えた。その後、あえて2度目のバルセロナに向かい、ガウディ建築の世界へと進んでいった。

どこから始めるか。まず、グエル公園の30数か所ある階段の実測から取りかかった。測ることならできるはずだと、ノミの市で見つけた、骨董品に近い巻き尺を用いて実測をした。その内、カサ・パトリヨの断面透視図の作図に取り組み、半年以上を掛けて3m×1mの図面を1枚描き上げた。

いつものようにノートを取り出してはスケッチを始める。次に、その中に実測の寸法を書き込む作業に移る。いつのまにかノートはスケッチと寸法でいっぱいになる。こんなことを続け、それをもとに大きな透視断面図、立面図を描き続けてきた。建築というモノの実測を続けることは、私にとってガウディとの「会話」でもある。実測をとおして、ガウディが建築に込めた考え方、思い、構造的な合理性、さらには建築をとおして人を喜ばせる演出家という横顔までがわかるようになってきた。そして今、ガウディの建築と向き合い描き上げた図面と、その間、いろいろと考えてきたことをみなさんに紹介する機会を得た。デザイン・構造・神話、さらには地域性のアイデンティティまでも総合して組み立てられた、ガウディ建築の読解の楽しさに触れていただきたいと思う。そこはさまざまな読解を許容する、楽しい世界なのだ。

2012年1月15日

田中裕也

003 | 田中裕也によるガウディ建築のドローイングに寄せて……………ホワン・バセゴダ・ノネル

005 | はじめに

009 | 序 実測で見えてきたガウディ

025 | エル・カプリチョ *El Capricho*

041 | テレサ学院 *Colegio de las Teresianas*

065 | コロニア・グエル地下聖堂 *La Cripta Colonia Güell*

085 | グエル公園 *Parque Güell*

111 | カサ・バトリョ *Casa Batlló*

131 | カサ・ミラ *Casa Milà*

155 | サグラダ・ファミリア教会 *El templo de la Sagrada Família*

189 | 実測ノート編 グエル公園

217 | あとがき

220 | ガウディ 人と作品の略年表

225 | 「グエル別邸」 コミカルな鍛鉄のドラゴンによる演出

227 | ガウディ建築 MAP [バルセロナ]

謎解きガウディ

039 | ①ギター弾きの蜂

063 | ②不規則なファサードの規則性

077 | ③謎のデッサン

108 | ④プレファブ工法

124 | ⑤8種類の丸皿タイル

153 | ⑥リズムカルな波長

187 | ⑦幾何学トリック

実測ノートの余白

040 | ①温室の復元

064 | ②カルメンさんとの出会い

080 | ③視覚の矯正に気づく

110 | ④グエル公園の階段から実測を開始

130 | ⑤アイソメ図のインキング

154 | ⑥屋根裏階

188 | ⑦模型工房の職人たち



ガウディにふれる

—実測を通してわかってきたガウディについて伺います。最初に出会って、圧倒されたガウディとは、違ったガウディに出会えたのですか。

田中 ガウディの作品を測ることで、ガウディの選んだプロポーションが直接に伝わってくるわけだから、それを選んだガウディの考え方がわかってくるわけですね。私も建築家の視点で、ガウディの選んだ寸法について考える。そのことは、ガウディと私との対話でもあるわけで、その過程でガウディへの理解が深まるわけです。それは、ガウディがいなくても、残された作品を通してできるわけで、それが実測の良さですよ。測って初めて、ガウディに触ったような気がする。

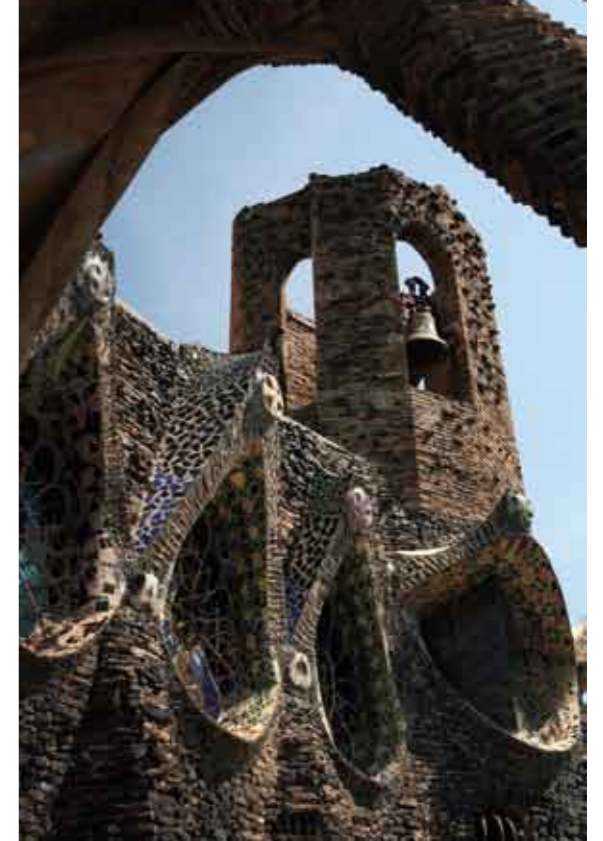
—通常の建築では、アイデア段階でのスケッチ、基本図面、実施図面などがあるわけですが、ガウディの場合は異なるようですね。ガウディの残したスケッチなどをもとにその意図を読み解いていくということになるのでしょうか。

田中 そうですね。ガウディが設計を実際に進める際には、模型とスケッチで進めていました。ガウディが残した図面は、ほとんど申請用の図面です。現場では、模型とスケッチにもとづき、細かいことは現場で進めていた、と聞いています。

—そういうガウディの建築を実測するということは、モノからアプローチすることになります。そうしたことを通じ、ガウディの作品に一貫している考え方がそこから見えてくると考えていいわけですか。

田中 その通りです。モノとして建築の詳細を見ることは、ガウディの意図を忖度することになるわけだけけれど、建築だけではなくて、たとえば装飾にかかわること、ガウディ建築のもつ「シンボリズム」の領域にも踏み込むことになります。

次に、それを探り出すわけですね。ただ、それは、実測を始めてだいたい後のことになります。最初のころはただ

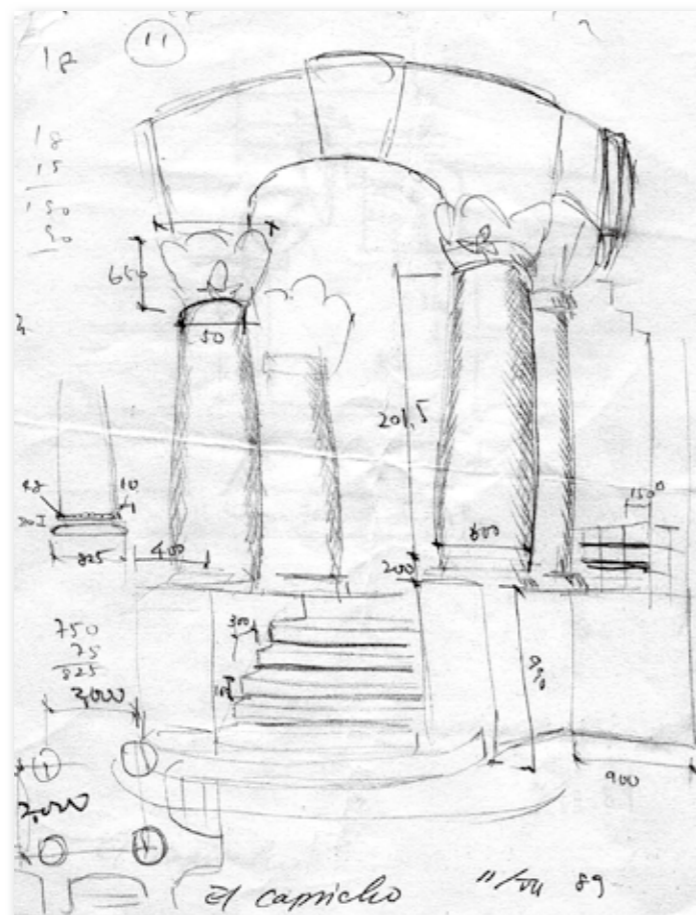


左頁：グエル地下聖堂 内部
上：グエル地下聖堂 鐘楼とステンドグラス
下：グエル地下聖堂 入口

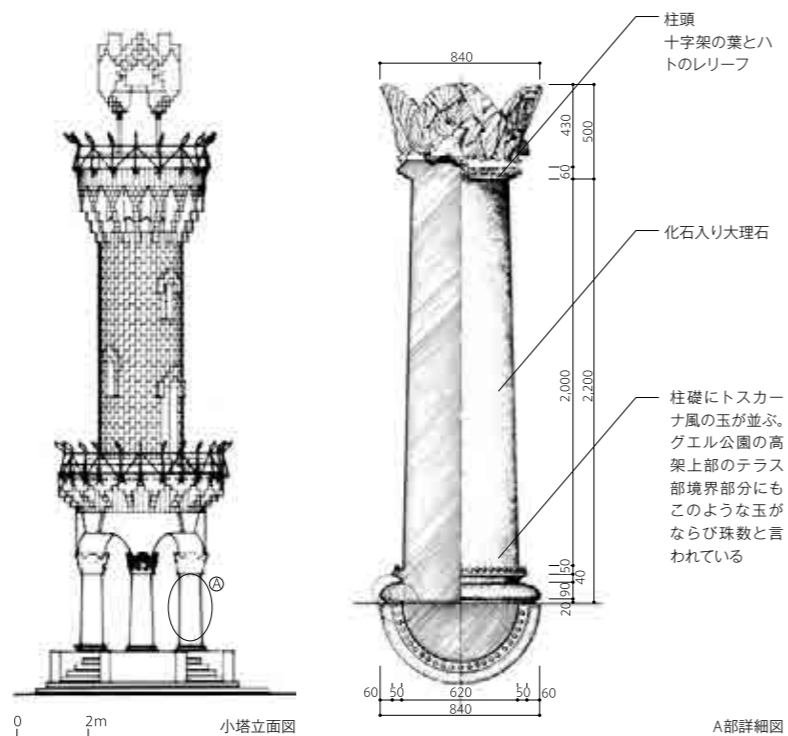


●4本足のポーチ

北西のコーナー玄関には4本足のポーチがある。平面で見ると北側を頭にして左上部隅45度に向けた玄関である。4本の柱は化石入りページュ系の大石で、一瞬グレーにも見える。直径825mmの円形の柱礎には、直径45mmの玉が48個リング状に並べられている。この大理石の柱は下部直径600mmと上部柱頭下部直径500mmの、高さ2,015mmの円錐台支柱となり、その上には高さ650mmの柱頭が納まっている。合計2,860mmの背丈となるロマネスク様式の柱である。その上に組積造のカルパネール・アーチが載せられ、内側にテンション鋼材が十字状にかけられている。これによってレンガ造の塔を支えている。この柱頭にはシュロの葉に小鳥が描かれている。ガウディにとってシュロの木は地中海植物のシンボルであり、小鳥は聖書で平和のシンボルとされている鳩を描いているのだろうか。

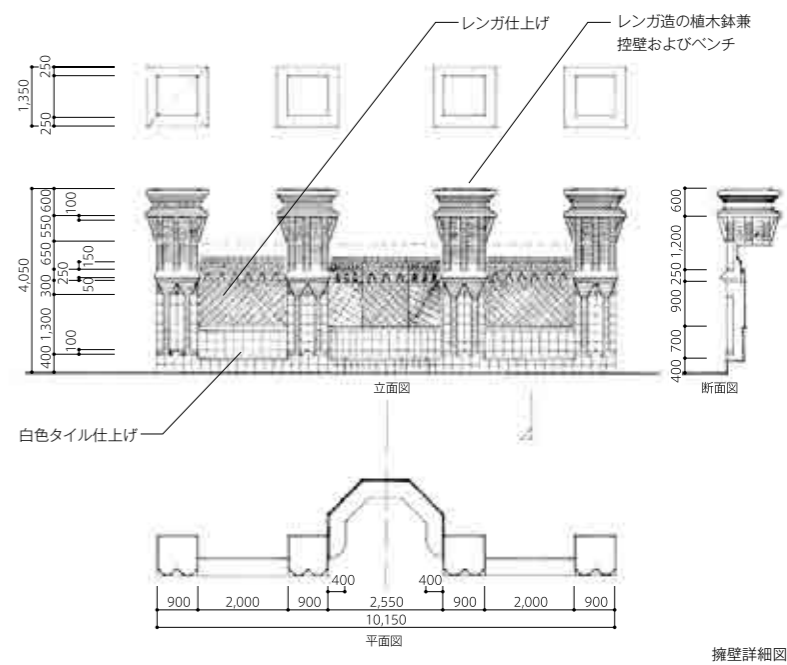
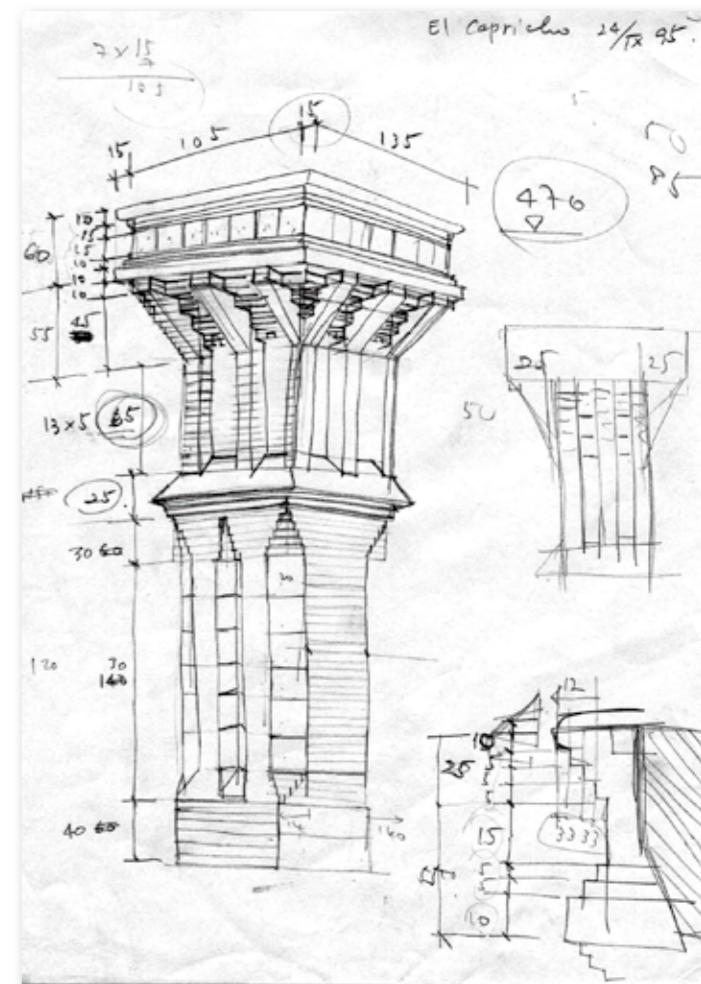


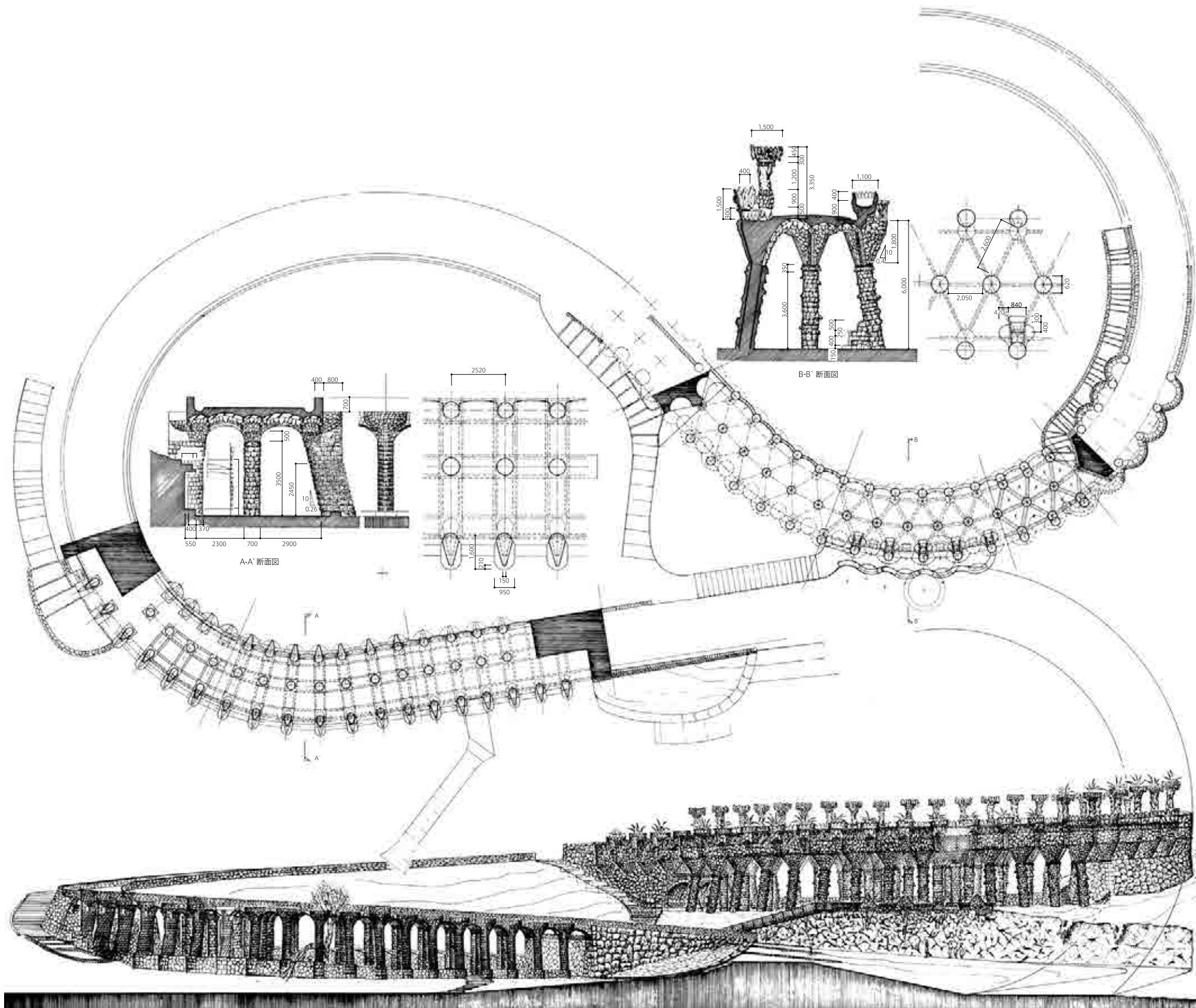
ガレージ部の上部礎石(要石)にはMのイニシャルがつけられていた。この玄関の三方所の要石にも同じようにM、D、Qと、いうようにイニシャルがつけられる予定があったのだろうか？



●土留め花壇とベンチ

「エル・カプリチョ」は、ソブレジャーノ地区の斜面中腹にある。傾斜する南面をテラスにするために平面計画をU字形にし、凹み部分を南面に向けている。そのため、南面のテラスは大きい。この傾斜面の土壁をレンガ造擁壁と4カ所の控え柱で土留め(terraplen)にしている。その控え柱は植木としても利用し、その間にベンチで土留めの足下を補強している。この構成が、後のガウディの作品でもあるグエル公園の高架に利用されている。この植木とベンチの構成による土留めは、高さ4m、長さ10mほどの幅で南側テラスを保護している。ベンチの座板高さ40cmは、グエル公園のベンチと同じである。擁壁は斜めに傾けた小口積みとなっている。





●プレファブ工法

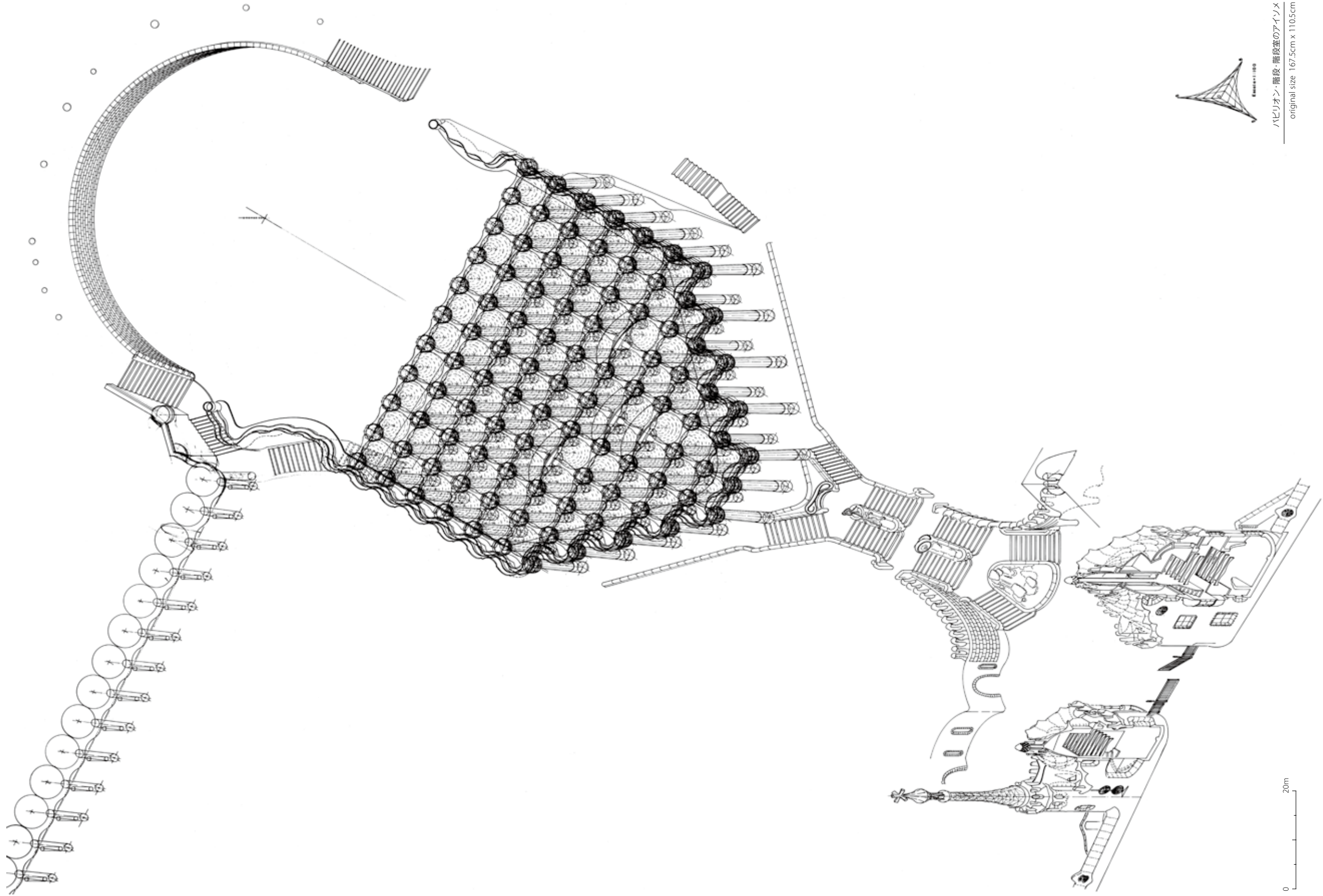
多柱室での施工法は、当時の写真によってプレファブ工法であることは知られている。しかし他の高架についてはどこにも説明されていなかった。ましてやそれらがプレファブ工法であったことなどは誰も知るよしもなかった。

そこで私はこれらの高架の構造を理解するために、他の車道兼歩道という高架でのプレファブ工法が考えられることを模型で検証してみたことがある。

グエルの家の裏側にある専用の高架では2カ所のアクセスがあるが、そのうち南側のアクセスの高架では柱頭まで捻れた柱となっている。この2種類の高架を2年で仕上げることだけでも驚異的なことである。ガウディは、この施工を合理化するためにプレファブ工法を採用した。

●高架D・Eのアイソメ図

グエル公園の高架は基本的に上が車道で下が歩道の構成となっている。高架Dはスラブが基本的に正方形で高架Eは正三角形となっている。しかも施工上は柱と梁が先に築かれ最後にスラブを嵌め込むというプレファブ工法でつくられていることもわかってきた



0 20m



ハビリオン、階段・階段臺のアイソメ
original size 167.5cm x 110.5cm

